

「教育実習」と「教職実践演習」

－成長する英語教師を目指して－

堀江 美智代

Teaching Practice and Seminars in Teacher's Training
－ A Study of English Teachers' Development －

Michiyo Horie

平成27年12月の文部科学省中央教育審議会（答申）は、教員養成段階は「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であることを認識し、「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させること」を求めている。

本研究では、現行の教員養成カリキュラムにおいて、学校現場を体験させる機会として位置づけられている「教育実習」と「教職実践演習」の履修に焦点をあて、本学英語科の学生を対象に質問紙による調査を実施した。その結果、全員が教育実習の意義を認め高く評価している一方、事前準備不足を感じている学生が半数いることも判明した。「教職実践演習」の授業については、全員が肯定的に評価しており、学校現場見学として「英語だけの英語の授業」を参観することの意義を認め、生徒主体のアクティブ・ラーニングが実施されていること等に感動し、英語教師として成長していくために、英語力・指導力強化の重要性を認識していることがわかった。

Key Words: [教育実習] [教職実践演習] [質問紙調査] [教員養成] [短期大学]

(Received September 11, 2017)

1. はじめに

グローバル化と技術革新が進展し、国際的な協調と競争の環境の中で、教師は、異文化コミュニケーション能力を身に付けた人材（グローバル人材）を育成するという重要な役割を担っている。平成27（2015）年12月の文部科学省中央教育審議会において「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」の答申がなされ、教員に求められる資質能力として、以下の3点が記載されている。

- (1) これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めて

* 鹿児島純心女子短期大学英語科（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目2番1号）

いくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力。

- (2) アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量。
- (3) 「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力。

教員養成段階は「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であることを認識し、「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させること」が必要である。さらに、教職課程の学生は、新たな教育課題（ICT、英語、道徳、特別支援教育）やアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善等に対応できることが求められているといえる。

さらに、平成29（2017）年7月の教員養成部会において「教職課程コアカリキュラム」及び「外国語（英語）コアカリキュラム」について報告がなされた。中・高等学校の英語教師として、以下の3点を身に付けることが求められている。「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」の5つの領域にわたる生徒の総合的なコミュニケーション能力を育成するための授業の組み立て方及び指導・評価の基礎を身に付ける。生徒の理解の程度に応じて英語で授業ができる指導力を身に付ける。国際的な基準であるCEFR B2レベルの英語力を身に付ける。

また、教員養成に関する改革の具体的な方向性の一つとして、学校インターンシップの導入が示されている。その実施にあたっては、教育実習との役割分担を明確化しつつ、受入校、教育委員会、大学との連携体制の構築、大学による学生への適切な指導などの環境整備について検討し、教職課程において義務化はせず各大学の判断により様々な形態で実施可能としている。表1に、教育実習と学校インターンシップの違いを示す。今後、学校インターンシップなどの導入により、学校現場や教職に関する実際に体験させる機会の充実が期待できる。

表1 学校インターンシップと教育実習の相違点

	学校インターンシップ	教育実習
内容	学校における教育活動や学校行事、部活動、学校事務などの学校における活動全般について、支援や補助業務を行うことが中心	学校の教育活動について実際に教員としての職務の一部を実践させることが中心
実施期間	教育実習よりも長期間を想定（ただし、一日当たりの時間数は少ないことを想定）	4週間程度（高校の場合2週間程度）
学校の役割	学生が行う支援、補助業務の指示（教育実習のように、学生に対する指導や評価は実施しない）	実習生への指導や評価表の作成（そのための指導教員を専任し、組織的な指導体制を構築）

(注)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」の「学校インターンシップの実施イメージ」からの抜粋

現在の教員養成のカリキュラムでは、学校現場を体験させる機会として「教育実習」と「教職実践演習」が必修科目として位置づけられている。「教職実践演習」は、「教育実習」のように全期間を通して学校現場を体験する科目ではない。しかし、教員として最小限必要な資質能力が教職課程の履修を通じて確実に身についたかを確認する科目であり、その中に、学校現場見学・調査の時間が組み込まれている。また、教育実習は、学校教育の全体を一人の教員の立場で体験するもので、免許種等により期間は異なるが、2週間から4週間の間、実際の学校で実習する。教育実習は、大学で学んできた知識と技能が現場でどの程度通用するかを試す場でもあり、教職への適性をあらためて考える機会でもある。OECD（2014）の調査によれば、比較可能な22か国の約半数において、実習期間は70～120日間であり、日本の実習期間は最も短い（高木，2015）。高木（2015）は、短い実習期間であるからこそ、大学の授業において理論的側面について省察を促し、教壇に立つまでの準備をすることは意味があると述べ、『言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）【英語科教職課程編】』の活用を提案している。

J-POSTLは、「自分自身について」、96の「自己評価記述文」、「学習・実践記録」の3つの内容で構成されている（JACET教育問題研究会，2014）。J-POSTLは、『ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ（EPOSTL）』の自己評価記述文を翻案化したものである。J-POSTLを使うと、言語を教えるために必要な教授法の知識や技術について振り返る（省察する）ようになり、自分自身の授業力を評価するのに役立つばかりでなく、自分の成長を確認しながら教職課程での教育経験を記録することができる。教育実習前の段階で理論について批判的に省察して、実習への準備をするとともに、成長し続ける教師であるために、実習後も省察を続けることは重要である。本学においても、J-POSTLの活用を今後検討したいと考える。

日本の教育実習期間は決して長いとはいえないが、実習生にとってきわめて重要な期間である。今まで学生の立場で学んでいたものが、実習生とはいえ教師として授業を任せられ、生徒と接することになる。また、実習で感動し教員志望を強固にする学生も多い。一方、この貴重な実習の成否には、本人の努力や実習校の指導だけでなく、大学における教員養成課程の事前及び事後指導が大きく影響すると考える。「教育実習」を充実したものにするためには、入念な準備をし、実習に望む心構えを新たにし、その内容・方法等について周知しておく必要がある。

本稿では、これらの2つの科目の履修に焦点をあて、まず、鹿児島純心女子短期大学（以下「本学」）英語科の教職選択者が体験した「教育実習」についての質問紙調査を分析する。次に、「教職実践演習」について実施した質問紙調査と学校現場見学（授業参観）レポートを分析する。最後に、「履修カルテ」を活用し、教員に必要な資質能力の指標に照らしつつ、学生の2年間の自己評価の変化について考察する。これらの調査分析結果を基に、「教育実習」と「教職実践演習」の成果と課題を探るとともに、本学での教職課程の改善を模索することが目的である。

2. 教員養成課程

2.1 本学英語科における教員養成

本学英語科における教員養成の目標は、「国際的センスや異文化間コミュニケーション能力を磨くとともに、英語教育に対する情熱や使命感、教育的愛情に溢れた豊かな人間性と教科指

導、生徒指導等に関わる実践的な指導力を兼ね備えた中学校英語教諭の養成」である。

創設以来本学は、教育界に数多くの人材を送り出してきた。教員採用試験の合格者が非常に多く、卒業生が鹿兒島県の中学校英語教員として広く活躍している。平成元（1989）年度から平成28（2016）年度までの本学における教員免許状取得者数及び採用試験合格者数は、表2のとおりである。かつては、中学校英語教員（鹿兒島県）の採用者の3分の1を本学で占めていたこともある。このように、長年にわたり多くの有為な人材を教育界に送り、鹿兒島県の実践的英語教育の向上に広く貢献している。

表2 平成元年度から平成28年度の中学校教員免許状取得者数及び採用試験合格者数

年度	平成1	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	
免許状取得者数	19	18	13	14	13	25	29	29	28	
採用試験合格者数	現 役	7	5	8	10	11	18	17	14	3
	卒業生	4	1	2	1	5	4	1	2	3
	合 計	11	6	10	11	16	22	18	16	6

年度	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17 ～28	計
免許状取得者数	14	18	28	15	11	14	22	87	360
採用試験合格者数	現 役	4	1	2	0	0	0	0	88
	卒業生	2	2	3	0	5	1	1	40
	合 計	6	3	5	0	5	1	1	128

(注1) 免許状取得者数と採用試験合格者数は、当該年度（卒業年度）に取得した人数である。

(注2) 卒業生合格者は、本学が把握している人数である。

教員免許状取得者は、年度により多少異なるが卒業生の約10%から30%である。教員採用試験において、平成4（1992）年度から平成8（1996）年度までは、毎年10名以上の現役合格者が出ている。しかしながら、最近は、短期大学から採用試験に現役で合格することは大変難しくなっており、平成13（2001）年度から平成28（2016）年度まで現役合格者はひとりも出ていない。採用が厳しい中、卒業生の中には4年生大学へ編入学したり、期限付き教諭を続けながら再受験したりして正式採用を目指しているものも多い。

2.2 教職に関する科目と「教育実習」

本学における平成28（2016）年度及び平成29（2017）年度入学生の教職に関する科目を表3に示す。14科目中12科目が、2年次前期までに開講される。それは、教育実習に行くまでに教職に関する基本的な知識や技術を身に付けておく必要があるからであり、短期大学の学生にとってはかなりハードなスケジュールとなる。学生たちは、2年前期に、「教育心理学」、「特別活動の研究」、「教育実習の研究」の3科目を履修する一方、5月下旬から6月にかけて3週間の「教育実習」に臨んでいる。

「教育実習」は、大学で学んだ理論を教育の現場で具体的に実践し、実習校での教育活動をとおして、教員としての資質を高めることがねらいである。米山他（2002）は、「教育実習」の全般的な目標として次の4つを挙げている。

表3 教職に関する科目

区分	授業科目	単位数	開講学期
教職の意義等に関する科目	教職の意義と内容	2	1年前期
教育の基礎理論に関する科目	教育史	2	1年前期
	教育心理学	2	2年前期
	教育法規等の研究	1	1年後期
教育課程及び指導法に関する科目	英語科教育法Ⅰ	2	1年前期
	英語科教育法Ⅱ	2	1年後期
	道徳教育の研究	1	1年後期
	特別活動の研究	1	2年前期
	教育の方法・技術	1	1年後期
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	生徒指導論	2	1年後期
	教育相談	2	2年後期
教育実習	教育実習の研究	1	2年前期
	教育実習	4	2年前期
教職実践演習	教職実践演習（中）	2	2年後期

- (1) 教育活動の実態に触れ、教育の在り方についての認識を深める。学校全体の教育活動を理解する。
- (2) 教科指導を実践する。教師の働きかけに対応して、生徒がどのように思考し、行動するかを把握し、効果的な学習指導を実践する基礎を習得する。
- (3) 教師としての、職務、勤務の基本的な事項を理解する。
- (4) 教師の特性を理解し、自分の長所と短所に気づき資質向上のための努力目標を知る。

以上のような目的からも、「教育実習」が単に教科の指導や授業技術の修練にとどまるものではないことがわかる。学校教育全体に参加することによって、幅広く教育の実態を把握し理解を深めることが大きな目的となる。

教育実習生を受け入れる中学・高校の教員が重視していることとして、広野他（2004）によれば、以下の3点が明らかになっている。(1)実習生としてふさわしい資質は、「教職への熱意と意欲」と「生徒を理解しようとする姿勢」である。(2)実習生に準備させている内容は、「指導略案」と「教具・教材」である。(3)実習生に求められている英語力は、「適切な発音」・「ALTとのコミュニケーション」・「英語での授業」である。阿久津（2008）は、聖学院大学の実習生がこれらの要求に的確に応えることができたかについて検証している。結論として、中学・高校の現場の要求は概ね満たしているが、学生達自身は、自分の英語力に対する不安が強いとしている。教育実習受け入れ校からの要望は様々であるが、まとめると、「教育に対する意欲」、「知識と英語力」、「生徒理解と生徒とのコミュニケーション」、「社会人としての常識やマナー」の4点が求められている。

2.3 「教職実践演習」の趣旨と概要

平成18（2006）年7月、中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」の中で改革の方向性が示され、大学の教職課程の総まとめの科目として「教職実践演習」が新設されることになった。この中教審の答申を受けて、教職課程の質的水準の向上を目指し、

平成22(2010)年度の入学生のカリキュラムより「教職実践演習」が必修科目として導入された。本学では、2年次後期に2単位の講義科目として開講され、平成23(2011)年度から本格的な授業の開始となった。

「教職実践演習」は、教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものである。学生は、この科目の履修を通じて、将来教員になる上で自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

「教職実践演習」の履修を通じて、教員として必要な資質能力の確認が行われるようにするために、教員として求められる以下の4つの事項を含めることが文科省より示された。

- (1) 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- (2) 社会性や対人関係能力に関する事項
- (3) 幼児児童生徒理解に関する事項や学級経営等に関する事項
- (4) 教科・保育内容等の指導力に関する事項

上記の教員に必要な資質能力(4項目)を踏まえて、「到達目標」(12項目)、「目標到達度の確認指標例」(16項目)が提示されている。

授業方法・内容については、講義だけでなく、役割演技(ロールプレイング)やグループ討議、事例研究、学校現場の見学・調査、模擬授業等を取り入れること、また、学校現場の視点を取り入れる観点から、現職の教員または教員勤務経験者を講師とした授業を含めることと記載されている。また、入学段階からの学生の学習内容や理解度を把握するために、学生一人一人の「履修カルテ」を作成するように指導されている。

「教職実践演習」に関する先行研究に関して、斉藤(2016)は、主に3点の傾向が見られるとしている。それは、(1)全学的教職課程のカリキュラム改善とニーズ調査を試みた共同研究、(2)「教職実践演習」の授業実践とその調査を行った研究、(3)ユニークな手法を導入した「教職実践演習」の授業実践研究である。その結果、「教職実践演習」はまだ試行的段階に過ぎず、体系的・理論的研究にはまだ至っていないと述べている。

2.4 履修カルテ

「履修カルテ」は学生自身の教職課程の履修履歴の記録である。学生は、入学後から卒業まで「履修カルテ」に記入し、教員に求められる力を意識的に高め、教職課程を計画的に履修していくことが求められる。また、どの程度教員としての資質能力が身についているのかを確認することができる。各自の課題を踏まえて、「教職実践演習」の学びがより充実したものとなる。本学の「履修カルテ」は、下記の4つのセクションからなる。

- I 教職関連科目履修状況 (1. 総合人間科目, 2. 教職に関する科目, 3. 教科に関する科目)
- II 資質能力の指標についての自己評価
- III ボランティア・介護等体験実習・教育実習などの経験
- IV 教職関連科目履修についての自己評価及び教職を目指す上での課題

Iの教職関連科目履修状況は、各学期末に、教職関連科目で履修した科目について、成績と「学んだこと・さらに努力すべきこと」を記入する。各科目150字程度でMoodleを使って入力する。また、1年修了時、2年前期修了時、2年修了時に「II資質能力の指標についての自己評価」(表4)を記入する。自己評価は、4段階評価である。

IIIには、社会福祉施設における介護等体験実習、特別支援学校における体験実習、教育実習やボランティアなどの経験について、期間、場所、内容・学んだこと・反省を記入する。IVの欄には、各学期末、教職関連科目履修についての総合的な自己評価および教職を目指す上での課題を記入する。

学生は、Moodleを使って各学期末に入力し、ファイルを担当教員へ提出する。教員が入力内容を確認し、担当教員所見の欄に記入後、ファイルを返却する。「履修カルテ」は、基本的に学生本人が保管管理し、履修状況は各自の責任において確認している。また、2年次後期、「教職実践演習」の最初の授業に、「履修カルテ」のファイルを持参し確認することになっている。

表4 資質能力の指標についての自己評価

必要な資質能力の指標		
項目	指標	
学校教育についての理解	教職の意義	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。
	教育の理念・教育史・思想の理解	教育の理念、教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を習得していますか。
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。
子どもについての理解	心理・発達論的な子どもの理解	子どもの理解のために必要な心理・発達論的基礎知識を習得していますか。
	学習集団の形成	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得していますか。
	子どもの状況に応じた対応	いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。
他者との協力	他者意見の受容	他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができますか。
	保護者・地域との連携・協力	保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか。
	共同授業実施	他者と共同して授業を企画・運営・展開することができますか。
	他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。
	役割遂行	集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。
コミュニケーション	発達段階に対応したコミュニケーション	子どもたちの発達段階を考慮して、適切に接することができますか。
	子どもに対する態度	気楽に子どもと顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができますか。
	公平・受容的態度	子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができますか。
	社会人としての基本	挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項が身についていますか。

教科・教育課程に関する基礎知識・技能	外国語科(英語)	これまで履修した英語教育分野の科目の内容について理解していますか。
	教科書・学習指導要領	教科書や中学校学習指導要領(外国語編)の内容を理解していますか。
	教育課程に構成する基礎理論・知識	教育課程の編成に関する基礎理論・知識を習得していますか。
	道德教育・特別活動	道德教育・特別活動の指導法や内容に関する基礎理論・知識を習得していますか。
	総合的な学習の時間	「総合的な学習の時間」の指導法や内容に関する基礎理論・知識を習得していますか。
	情報機器の活用	情報教育機器の活用に係る基礎理論・知識を習得していますか。
	学習指導法	学習指導法に係る基礎理論・知識を習得していますか。
教育実践	教材分析能力	教材を分析することができますか。
	授業構想力	教材研究を生かした英語の授業を構想し、子どもの反応を想定した指導案としてまとめることができますか。
	教材開発力	教科書にある題材や単元などに応じた教材・資料を開発・作成することができますか。
	授業展開力	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができますか。
	表現技術	板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けていますか。
	学級経営力	学級経営案を作成することができますか。
課題探求	課題認識と探究心	自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持っていますか。
	教育時事問題	いじめ、不登校、特別支援教育などの学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができますか。

3. 研究の方法

3.1 調査方法

平成28(2016)年度と平成29(2017)年度に教育実習を実施した本学英語科の2年生10名を対象に、意識調査を実施した。無記名で調査紙への回答を求めたものである。調査は、平成29年度は、教育実習終了後2017年6月に実施した。平成28年度は、「教職実践演習」に関する質問も含めて、後期の授業終了後2017年2月に実施した。平成29年度の「教育実習」の履修者6名と平成28年度の「教育実習」と「教職実践演習」の履修者4名が回答し、回答率は100%である。

3.2 調査内容

調査紙は2種類ある。1つは教育実習に関するアンケートで、質問項目は12問ある。内容は、教育実習の意義、事前準備内容の有益度、実習の評価や後輩へのアドバイス等である。平成28年度と平成29年度に教育実習を実施した10名が回答している。2つ目は、2年次後期に開講している「教職実践演習」に関する質問で10問ある。内容は、英語だけで授業が行われている中学校の授業参観に関する質問や、学生自身が英語のみで授業を行った感想、英語の授業を英語で

行う利点と問題点等である。調査項目は、中野（2000）を一部参考にして作成しており、平成28年度に「教職実践演習」を履修した4名が回答している。調査紙は、多肢選択方式と自由記述方式の質問項目から構成されている。尺度については5段階ではなく、4段階の尺度を用いた。

調査紙以外に、「教職実践演習」における学校現場見学・調査として、鹿児島純心中学校（以下「純中」）の英語の授業を参観した学生のレポートを分析する。さらに、「履修カルテ」から教員に必要な資質能力の指標に基づき、学生の自己評価が2年間を通してどのように変化したかを考察する。

4. 結果と考察

4.1 教育実習

「教育実習は有意義だったと思いますか」という質問に対し、9割が「とてもそう思う」と回答しており、「まあそう思う」を合わせると全員がその意義を認め高く評価しているといえる。「教育実習に行く前の事前準備は、どの程度できていたと思いますか」という質問については、「まあできた」が5割、「あまりできなかった」が4割、「まったくできなかった」が1割いる。実習前の準備に関しては、準備不足を感じている学生が半数いることがわかった。

表5は、教育実習の事前準備ができたと思う理由およびできなかったと思う理由を示している。同様の内容はまとめて、() に人数を示した。

表5 教育実習の事前準備ができたと思う理由、およびできなかったと思う理由

思う理由 事前準備ができた	事前に担当クラスの授業がどの程度進んでいるかを聞くことができ、それに合わせてある程度教材研究ができた。(2)
	かなり準備して行ったわけではないが、困ったことは特になかったので、しっかりと短大の授業さえ受けていれば大丈夫だと思う。
	実習前に模擬授業を5分で行い、用意できる教材は準備できたから。(2)
思う理由 事前準備ができなかった	模擬授業と指導案についてはきちんと勉強することができたが、担当学年で使えそうな英語活動やアクティビティーをもっと調べればよかったと思う。
	担当学年、生徒の実態等がまったくわからなかった。
	教育実習に行く前は、しっかりできたと思っていたが、実際に行ってみると、自分自身の英語のレベルを上げること、生徒への授業の活動内容を考えるなど、自分自身でもっとできることがあったのではないかと感じたため。
	何をすべきかよくわからなかった。

つまり、実習前に担当学年や進捗状況がわかった学生は、教材研究などの準備ができたため、実習準備がある程度できたと評価しているが、実習前に担当学年がわからなかった学生は、準備不足を感じているようだ。また、実際に実習に行ってみると、事前にもっとできることがあったと気付いた学生もいた。

図1は、教育実習に行く前に学習した内容の有益度を尋ねた結果を示している。「とても役に立った」という割合が最も高いのは、「模擬授業の実施」と「DVDやビデオ視聴による授業研究」(8割)であり、次に「現役の中学校教師による講義」(7割)、「指導案の作成」(6割)、「実習先での心得」(6割)と続く。教職を選択している学生が少ないため、全員に模擬授業を実施させているが、実習前に、大学で指導案を作成し模擬授業を実施していることはかなり役に立っているようである。また、現役の中学校教師を招いて、前期と後期に1回ずつ講義を行っているが、指導方法だけでなく現場の生の声を直接伺うことができ、これも大変有益なようである。

有益度が若干低いのは、「中学校教科書の分析 (Text evaluation)」, 「言語活動の進め方」, 「スキル別指導法」, 「Idea Fileの作成」である。「とても役に立った」か「少し役に立った」と回答している学生が6割から8割いる一方で、「あまり役に立たなかった」という学生が2割から4割いた。どういう理由で役に立たないと感じたのかは、理由に関する質問項目がなかったため不明である。今後その理由を踏まえた改善が必要であろう。

「教育実習に行く前に、やっていたらよかったと思うことは何ですか」と尋ねた回答結果をまとめると次のようになる。同様の内容はまとめて、() に人数を示した。

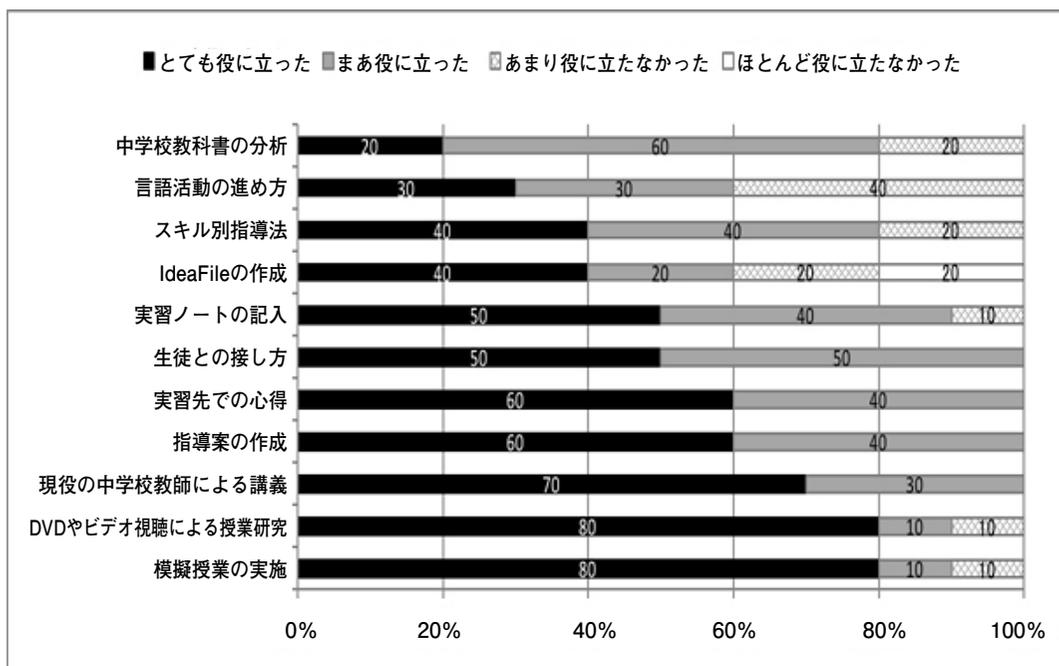


図1 事前学習内容の有益度

- ・ 英語の勉強、発音や文法事項を徹底して学び直す。特に発音は重要。(4)
- ・ 自分の担当学年で使えるような英語活動について調べておく。(2)
- ・ 活動を行う上で必要になってくるため、未習・既習の単語や文法事項の把握
- ・ 扱いそうな異文化について調べておく。

- ・ 黒板に文字を書くことに慣れること
- ・ 電子黒板やパワーポイントを使った模擬授業
- ・ 1時間分だけでも、指導案を作っておけばよかった。実習が始まると忙しい日々が続くので、一つでもストックがあれば授業や先生方の指導にスムーズに入れるのではないかなと思った。

以上のように、学生たちは、事前準備として、英語力の向上、教材研究と指導案の準備、ICTを活用した模擬授業の実施などを指摘している。

図2は、「教育実習に行って、英語教員に向いていると思いましたが」と「教育実習に行って、将来英語教員になりたいと思いましたが」と尋ねた結果である。「英語教員に向いていると思った学生は7割、将来英語教師になりたいと思った学生は8割いる。実習前と比較できないが、教育実習に行き、自分の教員としての適性を考え直した結果、やはり教員を志望する学生が8割いることは喜ばしいことである。教育実習が有意義であったことと関連していると考えられる。

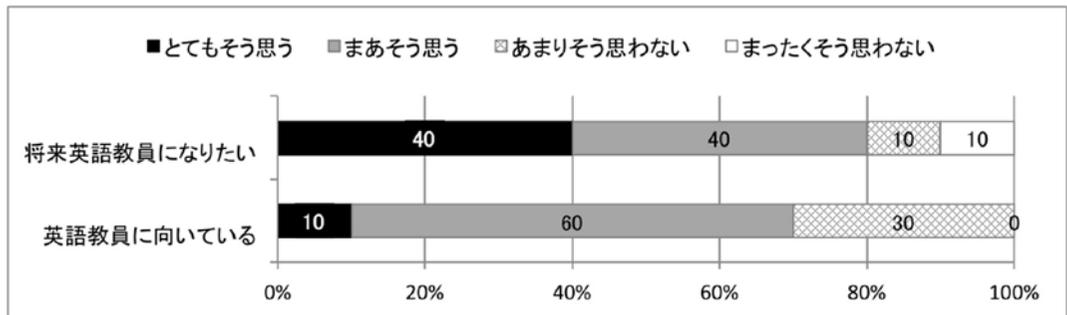


図2 英語教師志望と教員の適性

図3は、教育実習を振り返ってみた評価を22項目についてまとめたものである。項目は、大きく3つに分類できる。教科指導に関する内容、生徒や指導教諭との関わり、実習中の態度や生活に関する内容である。自己評価が最も高い内容は、「生徒たちとうまく話ができた」、「生徒たちと接する時間は十分に取れた」「指導教諭との人間関係はうまくいった」「服装や身だしなみは整っていた」で、9割の学生が「とてもそう思う」と回答している。次に、8割の学生が「とてもそう思う」と回答しているのが「健康管理はきちんとできた」「実習校の先生方との人間関係はうまくいった」である。教科指導に関する内容で自己評価が高いのは、「楽しく学べるように工夫できた」と「授業中大きな声で、はきはきと話すことができた」で、「とてもそう思う」と回答している学生が7割いる。

自己評価が低い項目としては、「授業に必要な専門知識は十分だった」と「適切な発問や指示ができた」が該当する。「あまりそう思わない」と回答している学生が4割おり、専門知識の欠如と指導力不足を認めている。しかしながら、「研究授業はうまくいった」と回答している学生が、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると7割いることから、教科指導に関して概ね満足していると考えられる。

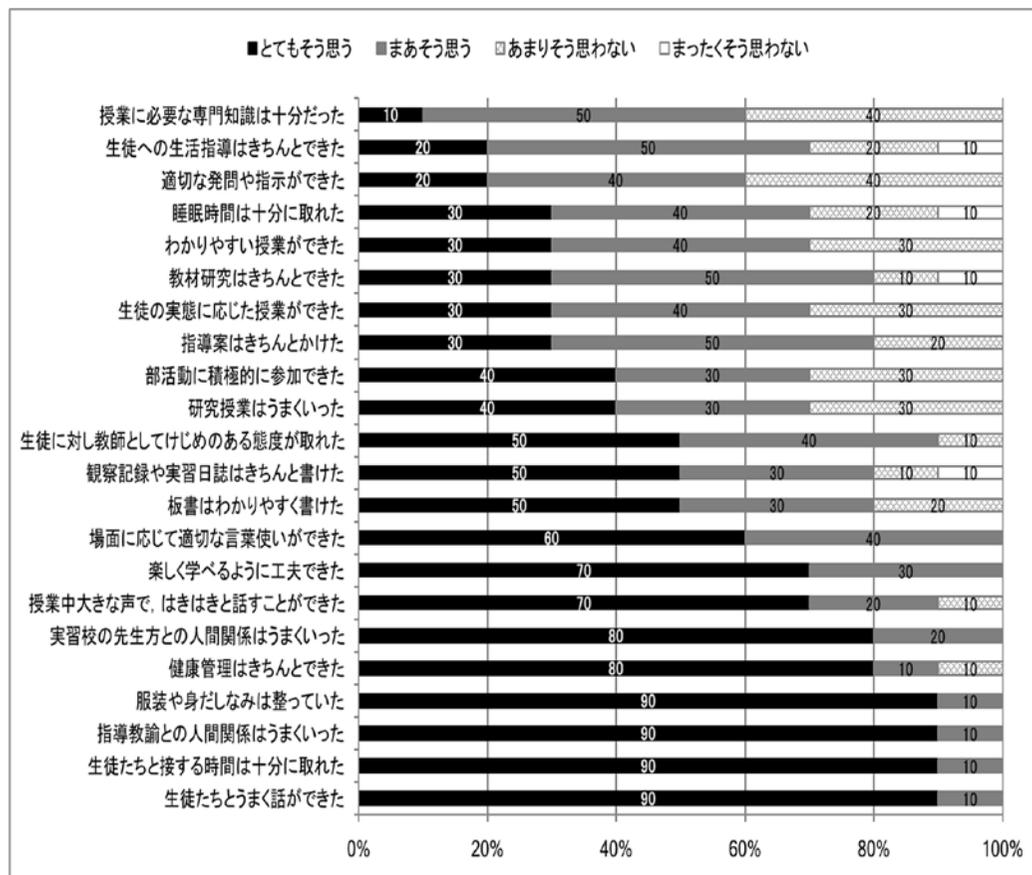


図3 教育実習の振り返り (評価)

教職を選択する後輩に対して、教育実習期間中のアドバイスを記載してもらったところ、表6のような回答結果となった。内容は、指導面、英語力、生徒理解、実習中の意欲・態度・マナー、健康・精神面についてのアドバイスが多岐にわたっている。その中で、生徒と積極的に関わるように助言している学生が一番多い。次に、実習に臨む態度として、常に笑顔で感謝の気持ちを持って前向きに取り組むことが大事だと述べている学生が多い。また、指導面では、英語以外の授業参観やICT活用についての助言も多かった。

表6 教育実習期間中の後輩へのアドバイス

指導面	電子黒板やパワーポイントを使った授業に慣れること (2)
	英語だけでなく、いろいろな教科の授業を参観し参考にする (3)
	教材研究や授業に熱心に取り組むこと
	一つ一つの授業を大切に (準備をしっかり、授業後すぐに反省)
	指導案の書き方が、学校や指導教諭の先生によって違うと思うので、作成する前に確認すると良い
	指導案作成は早めにする

英語力	英語の勉強をしっかりと、特に、発音に気をつけること (2)
	板書、アルファベットの書き順に注意すること
生徒理解	生徒と積極的に関わる (5)
	普段の何気ない行動や生徒との触れ合い方、言葉遣いなどに気を配ること
	実習生ではなく、先生として、生徒とコミュニケーションをとること
	生徒一人ひとりをよく観察し対応すること
意欲・態度・マナー	生徒にも先生方にも、元気よく挨拶をすること (2)
	笑顔 (4)
	常に感謝の気持ちを持つ (3)
	スケジュール管理は大事。大学では90分授業だったが中学校は50分で、なかなか慣れなかったから。
	わからないことはすぐに聞く (2)
	いつでも素直に謙虚でいること、学ぶという姿勢を忘れないこと (2)
健康・精神面	前向きな姿勢で臨むこと
	わからないことや少しでも悩むことがあったら、先生方が忙しそうでも申し訳ないと思っても、質問したり話をした方が良い。自分で抱え込みすぎない。
	準備に追われて寝不足になるが、できるだけ寝ること (2)
	中学校の先生方や生徒が助けてくれる。不安に思ってもなんとかやっけていけるので、自信を持って実習に臨んでほしい。

4.2 「教職実践演習」の授業

4.2.1 学校現場見学・調査

平成28(2016)年度後期の「教職実践演習」の授業を履修した学生4名の調査結果を下記にまとめる。まず、学校現場見学・調査として実施している純中の英語の授業参観についてである。12月上旬に1年生と3年生の園元教諭の授業を1時間ずつ参観し、授業参観後は担当教諭との意見交換会を実施した。英語だけで英語の授業を実施している中学校教員は少ないのが現状であるが、園元教諭は長年にわたり純中で英語による英語の指導を実践している。その取組と成果については、共著(堀江&園元, 2017)としてまとめており、英語で授業を行うことは、生徒の「英語力(特にスピーキング力)」を向上させ、「英語好き」を育て「英語学習に対する意欲」を高めることが判明した。

履修学生に、園元教諭の授業をどのように感じたか尋ねたところ、全員が「とても良かった」と回答している。その理由として、「英語だけの授業で進められていて、すごく参考になった」、「自分たちが受けていた授業との大きな違いを感じ、今の中学生が受けている授業のおもしろみを体験できた。先生がとても教材研究と準備ができているのがよくわかった」、「学年に応じた丁寧な授業で、終始飽きさせない活動が豊富な授業だった」、「英語で授業をすると、生徒も自然に英語を身に付けることができると思った」ことを挙げている。

学生は、授業参観と意見交換に関してのレポートを毎回提出している。1年生の授業参観後、「特に参考になった点や工夫されていたこと」について、具体的に記述してもらった内容を下記にいくつか挙げる。()は同意見の学生数である。

- ・ 1年生は音や動きが含まれている活動が多く、New wordsや生徒がつかずいて言えなかった部分をチャンツやジェスチャーを使って繰り返し練習していた。ただ覚えるだけではなく、単語をジェスチャーで表しながら練習したり、難しい文章にチャンツをつけてテンポよく練習したり、一つの活動にたくさんの要素が入っていた。(3)
- ・ 声を出す活動がたくさんあり、生徒達がいきいきと発言していた。
- ・ まず最初に生徒に読ませる。そして、間違っていたら訂正をする。
- ・ パワーポイントの写真や動画がユニーク。音も出たので興味が引き付けられた。(2)
- ・ Canの使い方を生徒達が自分達で調べていたのは、アクティブ・ラーニングを取り入れていて、また、わからなかったら辞書やノートで調べていたので自分の力になると思った。
- ・ 説明は英語だが、スクリーンに日本語があって理解を助けていた。
- ・ 予習をとっても大事にされていた。それによって、先生がグループ活動をさせた際、自然と辞書を開く生徒がいた。
- ・ 英語を苦手と感じている生徒のサポートを英語の得意な生徒がしていた。

3年生の授業参観後、「特に参考になった点や工夫されていたこと」について、具体的に記述してもらった内容を下記にいくつか挙げる。()は同意見の学生数である。

- ・ 1つの授業の中に、楽しさとリズムの良さ、グループやペアなどの様々な授業形態があった。(3)
- ・ 1分間モノログで、3人グループになり、それぞれ調べてきたニュースを発表する。役割がスピーカー、リスナー、オブザーバー(話した語数を数える人)と決まっていて、交代していく。その後、発表したことについて5分間で書く。調べたニュースを、話して聞いて書いて、振り返る時間があったととても良かった。(2)
- ・ News reportは、ニュースを調べて発表することをタスクにすることで、英語の授業を通して政治に目を向ける習慣を身に付けることができる。(2)
- ・ 絵本を使って、3人グループでその場面についてHow manyやWhat's this?等を使って、内容についてのQ&Aをしていた。みんなで楽しみながら内容を理解できるし、自然と英語が出てくると思った。(2)
- ・ 英語のシャワーがいっぱい!そして、生徒が話したり、考えたり、意見を交換する時間もたくさんあった。生徒主体の授業で、アクティブ・ラーニングをすごく感じた。(2)
- ・ 1時間の授業が充実している。4技能の活動がすべて含まれていて、英語の力がかなりつくと思った。

以上のことから、「英語だけの英語の授業」を参観することはとても有意義であり、学生達は、生徒主体のアクティブ・ラーニングが実施されていること、楽しくリズムカルな活動が多く準備されていることに感動していることがわかる。

次に、授業参観後、園元先生との意見交換会に出席した感想を尋ねたところ、下記のような記述があった。()は同意見の学生数である。

- ・ 先生が、私達の質問に真摯に対応して、また、たくさんの情報を提供してくださってうれしかった。大変参考になることがたくさんあったので、今後活かしていきたい。(3)
- ・ 先生は、たくさんのセミナーに参加し、常に英語の授業研究をされていた。現状に満足せずに、常に生徒のことを考えながら努力し研究する姿勢の大切さを改めて感じた。(2)
- ・ 実際の生徒達の様子や授業の中で工夫していること、一つの活動がいろいろなことにつながるなど英語の授業はもちろんだが、教師という仕事について学ぶことができた。
- ・ こんなに素晴らしい先生でも、一つの授業にたくさんの時間をかけて準備を行い授業に臨んでいることがわかり、自分たちはどれだけ知識と準備が不足しているかというのを実感した。
- ・ 先生の生徒に対する愛情を感じ、先生の人柄ゆえに作り上げられている授業だとすごく感じた。
- ・ 生徒同士の教え合いや雰囲気作りを大切にしていること。また、生徒がみせた思いやりや感動を、みんなに伝えると生徒も嬉しいし、生徒のやる気も上がると思った。

以上のように、学生達は、園元先生と実際に話をしたことにより、先生の素晴らしい授業は、常に学び続ける教師として、時間をかけて努力されている結果であるということに気付いたようである。また、より良い学習環境作りのため、生徒同士や生徒と教師との関係に大変留意し授業で実践されているということにも感心している。

4.2.2 英語だけで行う模擬授業

学生自身が、英語で授業を実践してみてどのように感じたか尋ねたところ、全員が「あまりうまくできなかった」と回答している。では、どのようなことを難しいと感じたのであろうか。特に難しかった内容を3つ選んでもらったところ、全員が「文法の説明」と答えている。次に多いのは、「リーディング(本文の内容を紹介・説明)」(3人, 75%)であり、「言語活動の説明」(2人, 50%)と続く。「新出文の導入」、「単語の導入と発音の指導」、「リスニングによる内容理解」を指摘する学生が1名ずついた。一方、「文型練習」、「音読の指導」、「生徒への指示」、「生徒へのコメントやアドバイス」を選択した学生は1人もいなかった。やはり、英語で文法事項の説明をわかりやすくするのは、大変難しいと感じているようである。原因として、準備不足と英語力不足が考えられる。今後、学生達が園元先生の授業参観を活かし、英語だけの模擬授業をより良く実施できるように指導していきたい。

4.2.3 「教職実践演習」の授業評価

「2年後期に教職実践演習の授業があったことについてどう思うか」と尋ねたところ、「とても良い」(2人)、「まあ良い」(2人)と答えている。「教職実践演習」の授業を肯定的に評価している理由として、「教育実習が終わってからの良い振り返りの授業だった」「教職について学び、学生生活の集大成として授業に取り組むことができた」という回答が寄せられた。改善点について、特に記載はなかった。

4.3 英語による英語の授業

「中学校の英語の授業が、基本的に全部、あるいは、ほとんど英語で行われるとしたら、あなたはどう感じますか」と尋ねた。「とても良い」が2人、「まあ良い」が2人おり、全員が肯定的に捉えていた。さらに、「英語の授業を英語で行う利点と問題点」について尋ねた。図4にその結果をまとめた。

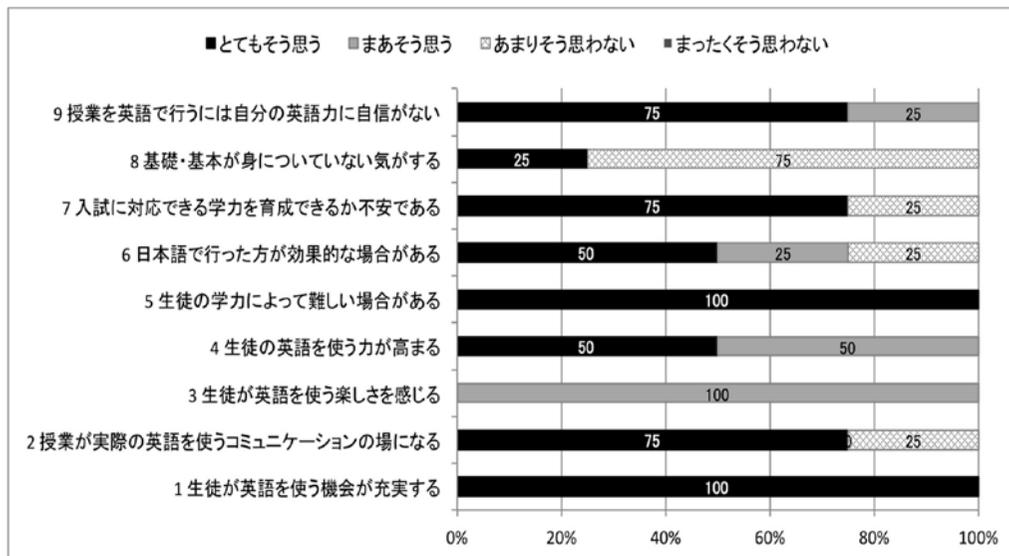


図4 英語の授業を英語で行う利点と問題点

図4の項目の番号で1番から4番は利点、5番から9番は問題点である。図4が示すとおり、利点の「生徒が英語を使う機会が充実する」については、全員が「とてもそう思う」と回答している。次に、「とてもそう思う」が多いのは、「授業が実際の英語を使うコミュニケーションの場になる」、「生徒の英語を使う力が高まる」である。一方、問題点や心配事項としては、「生徒の学力によって難しい場合がある」と感じている学生が一番多く、次に、「授業を英語で行うには自分の英語力に自信がない」、「入試に対応できる学力を育成できるか不安である」と考えている学生が多い。「基礎・基本が身につけていない気がする」については、「あまりそう思わない」が3人（75%）いる。これらの結果から、学生達は、英語で英語の授業を行う多くの利点を認めつつ、自分の英語力と生徒の入試対策について不安を感じているといえる。

4.4 履修カルテの分析

学生は、2年間の教職課程の履修履歴を「履修カルテ」に記録している。2.4で述べたように、1年修了時、2年前期修了時、2年修了時に「Ⅱ資質能力の指標についての自己評価」（表4）を記入する。図5は、各項目の指標の平均値（16点満点）とその推移を示している。2年修了時で平均値が最も高いのは、「他者との協力」（15.4）、次が「コミュニケーション」（15.3）である。最も低いのは「教育実践」（11.7）で、次が「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」（13.4）となっている。1年修了時に比べると、2年前期修了時と2年修了時は、どの項目も点数が上昇

しており自己評価はかなり高くなっている。折れ線グラフが示すように、学生は、成長や資質能力の向上を実感しているといえる。「教育実践」が低いのは、他に比べて能力が低いというよりも、英語教育に対する理解が深まったことによって、自分自身に対する評価の基準が厳しくなったことも考えられる。今後、数値による評価だけでなく、各項目で自己評価記述文を追加し学生が省察することを検討したい。

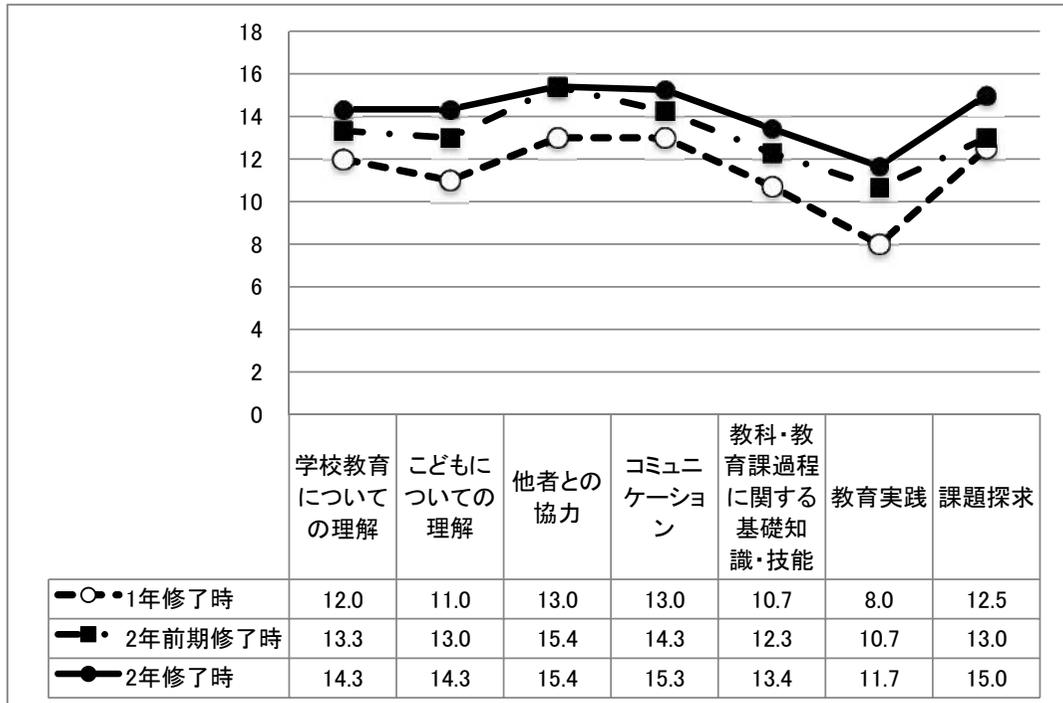


図5 資質能力の指標についての自己評価

5. まとめと今後の課題

本研究では、「教育実習」と「教職実践演習」について本学の学生に質問紙調査を実施し、その成果と課題を分析した。その結果、全員が「教育実習」の意義を認め高く評価している一方、事前準備不足を感じている学生が半数いることも判明した。学生たちは、事前準備として、模擬授業の実施、DVDやビデオ視聴による授業研究、現役の中学校教師による講義、指導案の作成が大変有益であったことを認めている。事前準備不足を感じている事柄として、英語力、教材研究と指導案の準備、ICTを活用した模擬授業の実施などを指摘している。

「教職実践演習」の授業についても、全員が肯定的に評価している。学校現場見学として「英語だけの英語の授業」を参観することはとても有意義であり、学生達は、生徒主体のアクティブ・ラーニングが実施されていること、楽しくリズムカルな活動が多く準備されていること等に感動していることがわかった。また、素晴らしい授業実践は、常に学び続ける教師として時

間をかけて努力されている結果であることを再認識している。そして、実際に自分たちが英語だけで行う模擬授業を実践したところ、全員があまりうまくできなかったことを反省し、特に、「文法の説明」や「リーディング（本文の内容を紹介・説明）」が難しいと感じていた。その結果、英語教師として成長していくために英語力・指導力強化の重要性を認識していることがわかった。

さらに、「履修カルテ」の2年間の分析から、すべての項目に関して自己評価が向上していることが判明した。「他者との協力」や「コミュニケーション」の評価が高い一方、「教育実践」の評価が1番低いことがわかった。今後、成長する英語教師を目指すために、学生の自己評価と省察がより重視されることになるだろう。「履修カルテ」だけでなく、高木（2015）が指摘しているように、模擬授業などの実践の機会が少なく、実習の期間も短い日本の学生にとって、「言語教師のポートフォリオ（J-POSTL）」を活用することが望ましいと考える。また、J-POSTLは現職教員になった後も、継続して活用することが可能という利点もある。

本学卒業段階で、教員となる際に必要な資質能力を確実に身に付けさせ、学校現場に送り出すことが、本来、教職課程に期待される役割であり、そのことが国民や社会の要請に応えることにつながるものと考え。本稿の調査分析結果を踏まえ、「教育実習」と「教職実践演習」の更なる改善を図り、学生達の教職に対する気付きや学びの促進に努めたい。

参考文献

- 阿久津仁史 2008. 「英語科教員養成の成果と課題」『聖学院大学論叢』20(2), pp.155-165.
- 斉藤ゆか 2016. 「課題探求能力を高める『教職実践演習』のあり方－学校教育及び生涯学習が扱う『社会』の検討から－」『神奈川大学心理・教育研究論集』39, pp.71-79
- JACET 教育問題研究会 2014. 『言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)【英語科教職課程編】』
- 高木亜希子 2015. 「英語科教職課程履修生による省察－言語教師のポートフォリオ(J-POSTL)を用いて－」『言語教師教育』2015 Vol. 2 No. 1, pp.59-74.
- 中野靖彦 2000. 「教育実習に関する研究－実習前後の心理的变化について－」『愛知教育大学研究報告, 49 (教育科学編)』pp.81-85.
- 広野威志・山崎朝子・茂岡千利世・酒井志延・久村研 2004. 『教育実習の受け入れ側の意識に関する調査』JACET第1回関東甲信地区大会口頭発表
- 堀江美智代・園元京子 2017. 「中学校における英語による英語の授業 その取組と成果－生徒の質問紙が示唆するもの－」『鹿児島純心女子大学研究紀要』第47号, pp.49-66.
- 文部科学省 2006. 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）Available:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm [2017年5月]
- 文部科学省 2015. これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について－学び合い、高め合う教員育成コミュニティーの構築に向けて～（答申）Available: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm [2017年8月]
- 文部科学省 2017. 教員養成部会(第98回)配付資料 教職課程コアカリキュラム案, 外国語(英語) コアカリキュラム案 Available: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

chukyo3/002/siryō/1387656.htm [2017年8月]

文部科学省 2017. 中学校学習指導要領解説 外国語編 平成29年7月

Available: http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afiedfile/2017/07/04/1387018_10_2.pdf [2017年7月]

米山朝二・杉山敏・多田茂 2002. 『改訂版 英語科教育実習ハンドブック』 大修館.

